

## 【エッセイ部門・最優秀賞】

### 私の素直な唇

鹿児島県立大島高等学校 第2学年 馬場 帆花

幸せを感じると、下唇を噛み締める。私には、そんな癖がある。

いつもより早く目が覚めてしまったある日の朝。スマホの光を目に焼き付かせる。画面に表示されたのは、「午前五時三十分」という文字。なんとなくロック画面のロックを解除し、カレンダーのアプリで今日の予定を見る。ある予定が目に入った。「小テストいっぱいデー」という文字で、私はすぐに身体を起こし、身支度をする。午前六時過ぎ。ドアを開けて、外の空気を一度吸う。学校へ足を進めた。早く学校に行って、小テスト対策をしよう、という一つの決意とともに。

校門をくぐり抜け、靴箱へ向かう。私の頬に触れる日の出前の涼しい風が心地よい。時計を見れば、時刻は午前六時四十五分。人の気配を感じない。学校に一番乗りである。そんな優越感を胸に、靴箱でローファーを脱ぐ。脱いだローファーを掴もうと、しゃがんだその時、私の瞳に何かが映った。地面に何か落ちていた。それは、教科書だった。落とし物だろうか。誰の教科書だろうか。一度拾い、裏に書いてある名前を見る。そこに書いてある名前の主は、同級生の男子だった

その名前の彼とは、私にたくさんの思い出をくれた友達。今はクラスが遠く離れ、かつて仲良くずっと喋っていたあの日が懐かしく思うほど、最近ではほぼ関わることがなくなった。そんな高校生活に少し寂しさも感じていた日々だった。そんな人の教科書。

置いたままにしている、彼が登校して靴箱に来たら、そのまま取って行くだろう。もしくは、彼と同じクラスの人が彼に渡すだろう。そう思い、私はその教科書から離れ、自分の教室へ向かった。しかし、その足がふと止まる。そして一呼吸を置くと、私はひたすらに走り出した。考えるよりも先に、足が動いていた。この時の感情の名を考える余裕など、どこにも無かった。私は一度、自分の教室に入り、鞆を置くと、すぐさま、ある場所へ向かった。それは、靴箱。彼の教科書が落ちていた、あの靴箱。少々息を切らしながら、彼の教科書を手取る。教科書に書いてある彼の名前をもう一度見て、その教科書を手に取り、私は教室へ戻った。彼の名前が書いてある靴箱にその教科書を入れたり、先生に落とし物として届けたりしてもよかったのだ。しかし、その時の私には、そんな行動をしようという考えは頭の片隅にも無かった。

「私が彼に教科書を届けに行く。」

この考えを貫徹した。私は、彼が登校してくる時間まで、小テストの勉強に集中する。私が彼に教科書を渡している姿を少し想像しながら。この時の感情を何というのか。私はふと考えたが、なんだか恥ずかしくなり、考えることをやめた。

午前八時。たくさんの生徒が教室に入る。「おはよう」が木霊する校内。すっかり顔を出した太陽が、生徒の顔を照らす。私は立ち上がり、教室を出る。そろそろ彼が登校して来た頃だろう。私は、彼の教室に向かった。彼の教室に着き、中を見る。来ていた。教科書の名前の主。彼は既に教室に入っていた。私は深呼吸をしてから教室に入り、彼のいる方向へ一直線。彼に話しかける。直接話しかけるのは、いつぶりだろうか。

「ねえ。これ、靴箱にあったんだけど…。」

私の声に、彼は振り向いた。声が震えていたかもしれない。いつもと違う声のトーンだったかもしれない。それでも私は平然を装い、彼の顔を見て、教科書を彼へ向ける。すると彼は満面の笑みで私に言った。

「馬場さん、ありがとう。馬場さん最高。」

私はそんな彼の言葉に、そっと微笑みだけを返した。そして、彼の教室を後にした。彼からの「最高」という言葉。その場で咄嗟に出た言葉であって、本気にする言葉などではない。それなのに、その言葉は、はしゃぐ子犬のように、私の頭の中をずっと駆け回っていた。廊下へと降り注ぐ太陽の光が眩しかった。身体がぼかぼかする。顔も少し熱くなっていた。それはきっと、朝の太陽のせいだ。そう信じたい。

私は、自分の教室に帰りながら、今朝の小テスト対策で覚えた古典単語や英単語をひたすらに思い出す。しかし、古典単語や英単語の引き出しを出すよりも先に、彼からの「最高」という言葉の引き出しの方が、先に引き出されてしまう。心の中では、いけない、と思いつつも、気づけば、私は自分の下唇を噛み締めていた。あの言葉を思い出すたび、強く、噛み締めていた。教室に帰り、髪を整えようと手鏡を覗くと、私の下唇には、くっきりと歯型が残っていた。恥ずかしながらも、しばらく消えないで欲しい。そう願いながら、私は一限目の授業の準備に取り掛かった。